



芝居のチラシ

つかこうへい

私は、10年ほど前から、東京都北区と提携して小さな劇団を作っている。毎年三月に、新人劇団員の募集をしている。大して宣伝もしないのに、毎年、250人ほどの人が全国から受けに来る。地方からの受験者は、その交通費、宿泊費だけでも大変である。中には、一流商社勤めや、銀行員が会社を辞めて受けに来る。二、三年前、医大生がいた。「芝居なんかするよりも、医者になつたほうがいい世のためになるぞ」と言っても、「いえ、芝居がやりたいんです」「ちょっと待って、親に電話して聞いてみる」

親御さんも「うちの子をよろしくお願ひします」と手紙を送りつけてきて、あきれ返った。

きつと、バブルがはじけて、誰もがお金以外のものに価値を見出し、自分らし

い生き方をしたいのだろう。
あるとき、沖縄の高校生の受験生がいた。
「沖縄から、大変だったのよ」と声をかけると、
「いえ、東京に来て、生まれて初めて電車に乗ただけでも楽しかったです。沖縄には電車がないので」と言われ涙が出た。
そんな思いをして、上京し、オーディションに合格したら、一年間養成所で芝居の勉強を重ねる。
そして、毎年12月から3ヶ月かけて、卒業試験を行なう。
やはり役者はお客さんが見てる前ですが、本物の力はつかない。劇団の稽古場に客席を作り、衣装無し、照明無しで、入場料500円で、公演をやるのだ。テレビに出てはいるわけではない無名の研究生の芝居は、観客を集めるのに、苦労する。
チラシを3万から5万枚刷り、北区内の駅前で手分けして配る。
夕方、帰宅を急ぐ会社員や、仕事帰りに遊びに繰り出すOJさん達、夕食の買物帰りの主婦の方達に、目を合わせ、手渡して一枚一枚配る。
「がんばってね」と言ってくれる親切な人もいるが、ほとんどは、チラシと目を通しただけで、カバンにしまわれ忘れ去られてしまう。

劇団のホームページで宣伝すれば、コストもかからずに、手間もかからないと言われるのだが、そんなものではない。芝居と言つものはアナクロな世界だと思ふ。
どんなに技術が発達したとしても、照明の明かりが数十年前に比べ、明るくなり、色のパリエーションも出てきた。音響設備も整い、音もクリアな音が出せるようになった。
が、肝心の、人間がそこにいなければ話にもならない。
もともと、私の芝居は照明、衣装、メイクをできるだけ廃し人間の汗や生命力を見せることで勝負してきた。
インターネット、テレビ、ラジオ、一方的に、情報を流すメディアが発達しても、やはり、その反応が逐一わかるチラシや、何気ない時に読み手に情報が入る紙のほうがいい。
それにチラシは、もしかしたら、公演の前日、カバンの底から、くしゃくしゃになつたチラシを発見して、「芝居でも見に行こうかな」とならないとは言えない。



つかこうへい 1948年福岡県生まれ、慶應義塾大学文学部中退。70年戯曲「郵便配達しはし」でデビュー。72年「熱海殺人事件」で岸田戯曲賞を最年少で受賞する。74年「つかこうへい劇団」を創立し「ストリップ物語」「いつも心に太陽を」などを公演。81年「蒲田行進曲」で第86回直木賞を受賞。94年に「北区つかこうへい劇団」を旗揚げする。著書に「娘に語る祖国」他多数。

Let's think together! 地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩

地球温暖化を解決する鍵、それは自主努力を続ける民の活力。

地球温暖化を防ぐことを目的として、わが国ではエネルギー利用に新たな税を課す動きが見られます。しかし、はたして一律に課税するという方法が、温室効果ガスを減らすという実効につながるのでしょうか？

以前からエネルギー削減に努めてきた産業界においては、CO₂の削減方法にも、産業ごとに適切な独自の取り組みがあり、現在、その各々が成果を上げています。こうした中、



新たな課税は、さらなるコスト負担をもたらす、省エネのための設備投資や研究開発の原資を損ね、結果として、自主的に取り組んでいる温暖化防止対策を阻害することにもなります。

解決の鍵は、真摯に自主努力を続けている民間企業の活力を信じることではないでしょうか？ その活力の一翼を担う私たち製紙産業もこれまでに以上にたゆまぬ努力を続けていきます。

家庭で、オフィスで、
名刺リサイクルの輪、広げよう！
リサイクル

今回は12月1日号、イッセー尾形さんです。